

体験から得た感動を 生き生きと自分の言葉で 表す詩の学習

大阪府大阪市立片江小学校
やまもと ち え み

山本知恵美

【実践の内容】

感受性や表現力の豊かな子どもの育成をめざして、これまで詩の学習に取り組んできた。具体的には、低学年で「言葉遊び」「言葉集め」などの活動を通して、楽しく詩に親しみ、中学年では「比べ読み」「続き詩」などの活動を通して、言葉に対する感覚を磨くようにしてきた。また高学年では「詩の鑑賞ノート」「取材ノート」の活用を図り、ふだんの生活のなかで見過ごしがちな自然の不思議や暮らしの変化といったものの観察眼を養うようにしていった。その結果、どの学年でも1年の間に、詩や作文の上達ぶりだけでなく、学校生活のさまざまな場面で、思考力や想像力、表現力を発揮して活躍する子どもたちの姿が見られるようになった。

【論文内容の紹介】

1 主題設定の理由

子どもたちの生活から感動が失われている。その原因を推察すると、たとえば、テレビなどの情報に操作され、他人と同じような見方、考え方にとらわれがちであるとか、ファミコンなどの遊びから、実際にやってみなくてもおよその結果を知ることができるのかといったことにあるのではないだろうか。子どもたちに感動する心、精神的な豊かさやゆとりを取り戻したいと願って、体験を重視し、感受性豊かに生き生きと自分の言葉で表現する詩の学習に取り組んでいった。

2 研究の仮説

- ・多くの詩に出会い、様々な考えに接して、

ものにはいろいろな見方や考え方があると気づくこと、実際に体験をしてみて結果を得ることで、感動は生まれるであろう。

- ・体験を通じて得た感動を、形式にとらわれず、感じたままを自由に詩に書き表すことによって、自分の言葉で生き生きと思いを表現する喜びを得ることができるであろう。

3 研究の具体的方策と実践

(1)実践1——1年単元「たのしい詩」

- ・谷川俊太郎や香山美子といった詩人の言葉遊び唄的要素のある詩を扱い、詩に親しみ、言葉の面白さを感じられるようにした。
- ・使える言葉を増やす、書きたいことを見つける、またその目を広げるために言葉集めを行うとともに、創作を行っていった。

(2)実践2——3,4年単元「自分の言葉で」

- ・リズム感のある詩、同じ題材について書かれた詩2編をディベート的話し合いの手法を用いるなどして読み比べ、多様なものの見方や表現方法にふれるとともに、自分の言葉で表現する面白さに気づくようにした。
- ・題名と1行目だけを記してある詩に続けて詩を書いていく「続き詩」を行った。子どもたちが自分のイメージや言葉を意識して詩を書けるようにすることが目的である。

(3)実践3——5年単元「よく見つめて」

- ・高村光太郎や大関松三郎など、子どもたちの好きな詩を毎日一編プリントし、それを詩の鑑賞ノートに貼って参考教材とした。
- ・ふだんの生活のなかで気づいたことや感じたことを取材ノートに書き留め、これをもとに毎日一編ずつ詩を書く習慣とした。

4 研究のまとめと今後の課題

これまでの研究成果はどの学年でも「毎日のくらしに感動を見だし、その感動をもとに創造性たくましく、生き生きと自分の言葉で表現できる子」へと、子どもたちが変わったことである。今後は、低学年から高学年へと明確な詩の学習指導系統案を作成し、さらに詩の学習指導の可能性を追求していきたい。